

特集

——シンポジウム「19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク——Harriet Martineauを中心として」

Illustrations of Political Economy (1832-1834) と ユニテリアンの知的伝統

大竹 麻衣子 (桜美林大学)

はじめに

*Illustrations of Political Economy*¹ は、経済学の原理と有用性を分かりやすく解説することを目的として、1832年2月から二年間にわたり毎月1号ずつ刊行された物語シリーズである。ほぼ毎号一話完結で、様々なテーマと舞台、登場人物からなる物語が発表された。当時としては未曾有のベストセラーとなり、当初は無名だったHarriet Martineau (1802-1876) は、このシリーズで作家としての揺るぎない地位を確立し、その後の長いキャリアの基盤を作った。しかし、この作品自体は瞬く間に忘れ去られた。すでに1870年代末にはこの作品が完全に過去のものとなり、出版当時の反響にはわかには信じ難いものになっていたことは、マーティノーの死の一年後の1877年に刊行された *Harriet Martineau's Autobiography*² に対する書評の中でも語られている。

They have fallen out of knowledge altogether by this time, and are to the present generation as if they had never existed. To ourselves, we confess, they read now like Sunday-school stories. . . . We read with amazement of the commotion of society. . . . and the fact is evident that she did gain for herself an important, and indeed exceptional, position in society — a position more distinct and certain than the best that is attained by writers much surpassing her in genius — all on account of these little Sunday-school stories. The only explanation of this astonishing fact that we can attain to is, that they suited, or were supposed to suit, a want of

the time. Didactic fiction. . . . is almost always popular with the simple-minded; and these tales were a kind of “reading made easy” of that social science which had begun to take hold upon the popular mind. . . .³

Margaret Oliphant (1828-1897) のものとされるこの書評の語り口は冷やかかで、ある種の苛立ちも見え隠れしている。それは、彼女の目には他の同時代作家と比べて非凡な才能も傑作もないマーティノーが、この『自伝』で改めて注目されて一時代を画した人物として記憶されることへの苛立ちであるが、『経済学例解』は、まさにそのような理不尽さの根源として語られている。オリファントは、今では「日曜学校の読み物」としか思えない一群の物語がほんの数十年前に大成功を収めたことは全く不可解で、その理由は「教訓物語は単純な人々に受けること」や、当時大衆の関心を集め始めていた社会科学、すなわち古典派経済学をやさしく読めるものにした点以外には見当たらないと述べている。

はたして、この作品が異例のベストセラーとなったことには、オリファントのいうように幸運な偶然以上の理由はなく、過ぎ去った時代の逸話として語られる以上の意味はないのだろうか。その答えが否であることは、長い忘却期間を経て1960年代から徐々に始まり2000年代以降ますます活況を呈しているマーティノーの執筆活動全般を再評価する多くの研究が示している⁴。本稿では、『経済学例解』は、若き日のマーティノーを育んだユニテリアンの知的伝統や人的ネットワークが必然的に生み出したものであり、それが同時代の社会にもたらした反響の大きさは重層的な意味合いを帯びていたことを示したい。

1. 出版当時の反響と社会状況

まず、『経済学例解』が引き起こした反響の大きさを具体的に見ておきたい。R. K. Webbによると、このシリーズの月ごとの売り上げ部数は約10,000部に達し、出版元のCharles Foxは推定読者数を144,000人と見積もっていたという⁵。1830年代は小説ならば月に2,000～3,000部売れば大成功と考えられており、それほど売れたのはディケンズぐらいだったという指摘も踏まえると、10,000部という数字がどれほどの意味であったかが窺

える⁶。マーティノーは『自伝』の中で、第1号の刊行直後から日刊、週刊、月刊の区別なく、すべての刊行物が好意的な書評を掲載し、自宅にはあらゆる賛辞を書き連ねた新聞や手紙、さらには国会議員たちからの政府報告書までが送られてきたと述べている。

The entire periodical press, daily, weekly, and, as soon as possible, monthly, came out in my favour; and I was overwhelmed with newspapers and letters, containing every sort of flattery. . . . Members of Parliament sent down blue books through the post-office, to the astonishment of the post master, who one day sent word that I must send for my own share of the mail, for it could not be carried without a barrow. . . .⁷

実際に、この時期のさまざまな書評には熱烈な賛辞が並んでおり、それらを読むとこの作品の何が同時代の読者や批評家の心をとらえたのかが見えてくる。

. . . [We turn] to the delightful *Political Economy* made easy of Professor Harriet Martineau. . . . she has employed to most admirable purpose very extraordinary talents; extraordinary, not because these Tales of hers are in themselves beautifully simple, yet extremely touching. . . . nor yet, because her notions indicate a clearness and comprehension of thought in relation to abstruse subjects of inquiry, a masculine faculty of abstraction. . . . but because the combination of these qualifications for her difficult task is a phenomenon.⁸

Here are scenes for the picturesque pen of Miss Martineau: they are painted with a power and quiet self-possession. . . . while didactic conversations that takes place amid them are full of practical instruction. *Weal and Wo* [sic] *in Garveloch* is one of the most valuable of Miss Martineau's admirable series. At this moment, no person is doing more

good in England than this lady: perhaps no other female ever occupied the same proud position of a national instructress, on the topics of the country's most essential interests.⁹

これらは、『経済学例解』シリーズが継続中であった1832年に、月刊誌 *The Eclectic Review* と週刊誌 *The Spectator* に掲載された書評からの引用である。いずれもこのシリーズを非常に高く評価しており、それぞれが評価している点も概ね共通している。第一のポイントは、「文学的な魅力」と「経済学についての分かりやすく実用的な解説」が融合、両立していることである。もう一つは国益に関わる問題について広く社会を啓蒙しようとする試み自体への賞賛である。ここには出版時期が大きく関わっている。『経済学例解』の出版に先立つ1830年代初頭のイギリスは、干草の焼き討ちや工場主の暗殺、労働争議や機械打ち壊しの暴動などが横行し、政治的・社会的に非常に不穏な空気が充満していた。このため、破壊行為や暴動は無知が生むものと考えた多くの知識人や教育家の間で、民衆に「正しい」知識を広めることで社会を安定させようとする動きもあった¹⁰。労働者を含む広範な読者層をターゲットに社会全体および個人に役立つものとして経済学の知識を普及させようとした『経済学例解』は、まさに時代の要請に応えるものだったのである。

しかし、このタイムリーさは、『経済学例解』の出版に先立つ時点では誰にとっても明白だったわけではない。そのことは、マーティノーの『自伝』の前半のクライマックスともいえる、このシリーズの出版をめぐる苦難と栄光のエピソードが如実に物語っている。1831年の秋から冬にかけて、経済学の原理と有用性をフィクション仕立てで解説するシリーズを刊行するというマーティノーの企画は、成功する見込みがないものとして多くの出版社に断られ続けた。各社共通の理由は、選挙法改正をめぐる議論やコレラの流行などで世の中が騒然としているなかで、このような企画が読者の支持を得ることは難しく、失敗した場合のリスクも大きい、というものだった。当時のマーティノーが全くの無名であったことも大きな要因であった。ようやく契約を結んだ駆け出しの出版者のC. Foxとの間では、屈辱的ともいえる厳しい条件を飲まざるを得なかったことは有名である¹¹。第1号

刊行後の前例のない売れ行きはまさに華麗なる逆転劇とも言うべきものだった。

2. 論争とバッシング

このシリーズが当時の社会や出版業界にもたらした反響の中で注目すべきものは、賞賛よりもむしろ賛否両論の論争やそれに付随した著者マーティノーに対する個人攻撃の方かもしれない。それらは当時の主要な定期刊行物の誌上で展開され、古典派経済学の理論を政治的課題の解決策として用いることの是非をめぐる議論と結びついて、それぞれの政治的、思想的信条を反映した論争の焦点の一つとなった。

19世紀初頭は、1802年の *The Edinburgh Review* の創刊を皮切りに、*The Quarterly Review* (1809-)、*Blackwood's Edinburgh Magazine* (1817-)、*The New Monthly Magazine* (1821-)、*The Westminster Review* (1824-)、*Fraser's Magazine* (1830-) など、19世紀の主要な定期刊行物の創刊が相次いだ。当初、これらの定期刊行物への寄稿者は、必ずしも報酬を必要としない法律や聖職などの専門職を持つジェントルマンが多く、むしろ自らの政治的、思想的な見解を表明する場として編集や執筆に携わった。しかし、読者層の拡大と読み物の需要を背景に定期刊行物は隆盛を極め、文筆のみで生計を立てるのに十分な原稿料が支払われたため、次第に自らの信条に沿った定期刊行物に書評やエッセイを寄稿して生計を立てる職業としての文筆家、ジャーナリストの誕生につながった。

主な定期刊行物と政治的立場の結びつきは、『エディンバラ・レビュー』はホイッグ主義、『クォーターリー・レビュー』と『ブラックウッズ』はトーリー主義、『ウェストミンスター・レビュー』は急進主義であった¹²。Claudia Orazem は、この時期の経済学をめぐる政党間の対立の構図を示す代表例として、桂冠詩人で強硬なトーリー派の論客でもあった Robert Southey (1774-1843) の1829年の著作、*Sir Thomas More: or, Colloquies on the Progress and Prospects of Society* と、翌年に出た Thomas Babington Macaulay (1800-1859) によるその書評を挙げている。サウジーは、産業化によって伝統的な絆を喪失しつつある社会を憂い、経済学は人々の貧困や不幸を合理化する理論だと批判した。これに対して、当時ホイッグ派の若手の論客として

頭角を現していたマコーリーが『エディンバラ・レビュー』で展開した議論は、サウジーの政治や社会に対する見解を批判するだけに留まらず、自らの論点を統計データで固めた上で、これほど自明なことが分からないのはサウジーに論理的な思考が完全に欠けているからだと主張するなど、相手の議論を土台から否定するものであった。このような断定的かつ一方的なスタイルは、党派と結びついた定期行物誌上での論争の特徴であり、マコーリー個人の特徴でもあったが、さらに、当時、存在感を増しつつあった経済学者の議論の特徴としても捉えられていた¹³。

次の引用は1832年に *Fraser's Magazine* に掲載された『経済学例解』シリーズへの書評の一節であるが、経済学と経済学者に対する敵意と反感が露わにされている。

... we might fairly express amazement at the delight with which Miss Martineau's tracts are received, if we could be surprised at any thing from a "political economist." These gentry are ever complimenting each other, and the whole class to which they belong, as the only men who know how to reason logically on the management of a country. The contempt which they uniformly express for the minds and arguments of those who receive not their fancies, is often ludicrous, sometimes irritating. And yet, in the present case, their warmest and most unqualified approbation is unhesitatingly given to a tissue of reasonings, which would disgrace the third class of any ladies' boarding-school of decent character, in these days of improved female education.¹⁴

ここでの『フレイザーズ』のマーティノーに対する批判は、経済学や経済学者に対する批判と一体化している。William Maginnによるとされるこの書評は、『経済学例解』シリーズ中のいくつかの物語について論じているが、各物語が提示する経済学の原理とその解釈に的を絞って批判しており、かつ、経済学者の手法に倣って統計データを用いて自説を主張するという意趣返しをしている¹⁵。このため、時に皮肉で苛烈な表現を用いつつも、論争と呼ぶのに相応しい筋の通った主張が展開されている。

一方、『経済学例解』に対する批判的な書評の中でも、最もネガティブでかつ悪名高いのが、1833年に『クォーターリー・レビュー』に掲載されたものである。この書評はGeorge Poulet Scrope (1797-1876)による経済学に関わる議論に、編集長のJohn Gibson Lockhart (1794-1854)と常連寄稿者のJohn Wilson Croker (1780-1857)が、マーティノー個人に対する下品で扇動的な中傷を散りばめた三者の合作であることが知られている¹⁶。結果的にこの書評はまともな議論としての効力が削がれ、品性を欠いた醜悪なものとして批判されることになる。論敵を徹底的に愚弄し、こき下ろすのが珍しくない当時の風潮からしても行き過ぎと見做されたこの書評から、『経済学例解』が当時の出版文化にもたらした波紋のもう一つの側面がうかがえる。

Here we have a monthly series of novels on Political Economy—Malthus, M’Culloch, Senior, and Mill, dramatized by a clever female hand. The authoress has, moreover, the high recommendation of being an Unitarian. . . . it is impossible not to admire in Miss Martineau’s productions—the praiseworthy intention and benevolent spirit in which they are written. . . . But it is equally impossible not to laugh at the absurd trash which is seriously propounded by some of her characters, in dull didactic dialogues, introduced here and there in the most clumsy manner; and what is worst of all, it is quite impossible not to be shocked, nay disgusted, with many of the unfeminine and mischievous doctrines on the principles of social welfare, of which these tales are made the vehicle.¹⁷

これは書評の冒頭に近い部分だが、「女性らしくない有害な教え」という言葉が筆者の全般的な主張を要約している。彼らが問題としているのは、作品が伝えるメッセージだけでなく、著者が女性であることなのである。これは、「賢い女性の書き手」、「ユニテリアンであるという極めて推奨すべき点」という嫌味にも表れている。「女性でかつユニテリアン」というマーティノーの特性の要約は、マーティノーと経済学、そして当時の出版文化

の関係を考える上での鍵になる。

3. ユニテリアンの知的伝統と経済学の原理

当時におけるユニテリアンであることの意味を確認したい¹⁸。『クォーターリー・レビュー』の表現はユニテリアンに対する社会一般の嫌悪や反感を前提としているが、冒頭で引用したオリファントの書評にも、マーティノーは「ユニテリアンとして育ったという非常に大きな根本的な不運」¹⁹を抱えていた、という一文がある。これほどネガティブな社会的意味づけをされるユニテリアンとはどのような宗派なのだろうか。ユニテリアン派は、18世紀の理性的非国教徒の緩やかで流動的な結びつきの中から18世紀末にかけて成立した宗派で、1774年に初めて公式に「ユニテリアン」と名乗る教会が生まれ、19世紀にはその呼称が一般的になった。イエスの神性や人間の原罪、地獄の存在など、正統派の教義の多くを迷信として否定したため、国教徒のみならず他の非国教徒からも異端視され、嫌悪感を持ってみられた²⁰。事実上、宗派内にはイエスの神聖の否定以外に統一された教義はなかったが、すべてのユニテリアンの見解が一致するもう一つの点が、宗派の創立の起源にJohn Locke (1632-1704) とその後継者であるDavid Hartley (1705-1757) の思想があることであった。このため、宗派内では彼らの哲学を学ぶことがある意味で必須となり、極めて知的な伝統が形成された。人間精神は生まれた時には白紙状態であらゆる発展の可能性を秘めているというロックの思想は、彼らが教育や環境を重視し、社会改革に熱心に取り組むことにつながった²¹。また、彼らの世界観はハートリーが唱え、Joseph Priestley (1733-1804) が強調した必然主義に基づいていた。すなわち、人間には自由意志はなく、その動機と行動はすべてそれに先立つ状況から必然的に生み出されており、神が創造した大きな因果の連鎖の中にある、という考え方である。このことは、この世界に働いている神の定められた法則を見出しそれにより良く従うことが、神のプランである社会の発展に貢献することになるという考え方につながった²²。

マーティノーも青年期に熱心にロックやハートリーの哲学を学んだ。特にハートリーから受けた影響は大きく、後年『自伝』の中で、彼の著作 *Observations on Man, His Frame, His Duty, and His Expectations* (1749)²³ につい

て、「おそらく私にとって聖書を除いて世界で最も重要な本」となった、と述べている。「そこには神聖で、精神を高揚させ、魅惑的であるだけでなく、非常に多くの哲学的な真実があり、その影響は人生のあらゆる出来事や経験に行き渡るものだった」だったともあり、この『自伝』が彼女の無神論者としての立場表明の後に書かれたことも考え合わせると、宗教的見解が変わってもなお否定しることができないほどの影響を受けたことがわかる²⁴。

マーティノーは、1832年1月、『経済学例解』シリーズの刊行開始の1ヶ月前に、ユニテリアン派の雑誌 *Monthly Repository* に経済学をテーマにした匿名の論説 ‘On the Duty of Studying Political Economy’ を発表している²⁵。この論説からはマーティノーの経済学の受け止め方がユニテリアンの知的伝統や信仰の特質と密接に結びついていることがうかがえる。

. . . every honest man who writes himself a member of society must understand political economy. . . We are not among those who mix up moral questions with political economy, as if they were not only connected but identical. . . but we think that this study partakes much more of the nature of a moral rather than a mathematical science, and are quite certain that it modifies, or ought to modify, our moral philosophy more extensively than any other influence whatsoever. . . Enough has been said. . . to prove the *utility* of the study of political economy. Much, very much might also be said of its *beauty*. Yes, its beauty; for notwithstanding all that is said of its dryness and dullness, and its concentration in matters of fact, we see great attractiveness and much elegance in it. . . Above all, is there no beauty in the dealings of providence with man? . . . Social institutions are the grand instruments in the hands of Providence for the government of man; and no labours can be more worthy of the disciple of Providence than that of deducing the will of God from the course of events — of ascertaining the Divine signature by which institutions are sanctioned or prohibited.²⁶

マーティノーは「社会の構成員と称するあらゆる心ある人は経済学を理解すべきだ」と述べつつ、それに続く部分では「道徳上の問題と経済学をあたかも同一のものであるかのように混同」するつもりはないと明言している。しかし、その先を見ると、経済学と道徳を不可分の関係と捉えていることは明白である。さらに、「経済学の有用性は十分語られてきたが、その美しさや魅力、優美さも語られて然るべき」と主張し、その美しさを神の意思に結び付ける議論からは、マーティノーが経済学を道徳のみならず、宗教にさえ近いものと見ていることがうかがえる。現代的な観点からは一見唐突にも思われるこの議論について、Claudia Oražem は、経済学をキリスト教の権威と結びつけることで万人に受け入れられるものにしようとする無理なこじつけであり、当時の読者にも受け入れ難かっただろうと指摘している²⁷。

しかし、経済思想史の領域における近年の研究動向を踏まえると、経済学とキリスト教を結びつけようとする発想や試みは19世紀前半においてはむしろ一般的であったと考えられる²⁸。特にマーティノーにとっては、ユニテリアン派の信仰とその基盤にあるハートリー哲学に由来するごく自然な議論であったことは、彼女の論説の特徴的なレトリックにも表れている。神意の働きを美や優美さなどの言葉で説明する独特な言葉遣いは、ハートリーの『人間論』の一節に非常によく似ている。

Those parts of the Arts and Sciences which bring Glory of God, and Advantage to Mankind, which inspire Devotion, and instruct us how to be useful to others, abound with more and greater Beauties. . . Thus the Study of the Scriptures, of Natural History, and Natural Philosophy, of the Frame of the human Mind & c. when undertaken and pursued with benevolent and pious Intentions, lead to more elegant Problems, and surprising Discoveries. . .²⁹

学問の探究とキリスト教徒としての務めの関係について述べている一節だが、ここにも、ある種の学問の探究は「神の栄光」や「人類への貢献」と結び付き、「美」や「優美さ」といった性質を帯びる、という主張が見られる。

ハートリーの『人間論』は、「観念連合説」として知られる人間精神の仕組みを機械論的、唯物論的に説明したものと捉えられがちだが、これは一面的である。この著作は、キリスト教の信仰の擁護という大きな枠組みが全体を覆う二部構成の大著であり、信仰に関わる議論は主に第二部で展開されている。そして青年期のマーティノーがこの第二部を特に熱心に読んだことは、この時期の弟 James Martineau 宛の手紙の記載から明らかである³⁰。

つまり、マーティノーは、経済学の原理を神の定めた世界の法則の一部と見なし、それを正しく理解することは個々の人々を救い、社会全体を正しく導くと信じていたと考えられる。このようなユニテリアンの発想と結びついた見方が、マーティノーに経済学を万能視させたり、いくつかの理論を丸呑みさせたりする一因となった可能性は否めない。『経済学例解』が説く経済学の原理と有用性がしばしばあまりにも単純化されたものであり、ナイーブな楽観主義に基づいていることは近年の批評でも繰り返し指摘されている。『経済学例解』の物語は、冒頭で引用したオリファントの書評にもある通り「日曜学校の読み物」、宗教小冊子のお話のように単純明快である。神への信仰が経済学の理解に置き換わっただけで、経済学の基本原理に則った行動をする善人は必ず栄え、経済学的に正しくなく、道徳的にも問題のある行動をとる悪人の人生は破綻するという、分かりやすい教訓物語である。また、それらは、経済学の原理を知って行動することであらゆる問題が解決され、幸福な結末が確実に訪れることを示すマニュアル的な物語でもある。このシリーズの人气が強烈で短命であった理由の一端はここにあると考えられる。

マーティノーの執筆の動機および理念が、貧しい人々を救い、より良い社会を実現することであったことに疑いの余地はないが、この作品は後の1840年代に Elizabeth Gaskell や Charles Dickens によって書かれた社会問題小説とは根本的に発想が異なるという見方が一般的である。社会問題小説が、複雑な社会構造の中で個人の力では容易に解決できない状況に置かれた人々の困難や苦悩を丹念に描き出すものだとすれば、マーティノーの物語が描くのは、生きた人々の現実よりもむしろ経済学の効能であり、経済学の原理が正しく理解されれば全ての問題が解決する世界である。

4. 女性作家の領域

『経済学例解』で説明される様々な経済学の原理の中で、同時代の批評家から特に激しい非難を浴びたのが、マルサスの人口論に基づく「予防的人口抑制」に関する議論である。シリーズ第6番目の物語 *Weal and Woe in Garveloch* (1832) がこの主題を扱っている³¹。スコットランドの離島の集落ガーヴェロッホで人々が不漁や不作による食糧不足に苦しむ中、ヒロインの弟 Ronald は、結婚して子供を作ることは社会の重荷を増やすことだと考え、以前から想いを寄せていた未亡人 Katie への求婚を諦めるという物語である。物語の語り手はロナルドの決断を道徳的に正しく理にかなったものとしているが、このような考え方の社会経済上の観点からの妥当性のみならず、女性であるマーティノーが予防的人口抑制、すなわち結婚を回避することによる避妊に言及したことへの批判やバッシングが噴出した。

She is, of course, the idol of the *Westminster Review*, and other oracles of that peculiar party; which, by all persons but themselves, is held to be the most nauseous mixture of the absurd and the abominable that existed. . . . it was indeed a wonder that such themes should occupy the pen of any lady, old or young, without exciting a disgust nearly approaching to horror. . . . Here is Miss Harriet in the full enjoyment of economical philosophy; her tea-things, her ink-bottle, her skillet, her scuttle, her chair, are all of the Utilitarian model. . . .³²

この文章と挿絵(【図1】)は、『フレイザーズ』に連載された著名作家紹介シリーズにおけるマーティノーについての紹介だが、いずれにおいてもネガティブな描写が際立っている。紹介文では「予防的人口抑制」に言及し、「このような話題が、恐怖にも近い嫌悪感を掻き立てることもなく、老若問わず、いかなる女性のペンに係ることがあろうとは信じ難い」等と述べられている。一方、マーティノーの肖像は、殺風景な部屋の暖炉の前に椅子を寄せ、背中をかがめて小鍋を火にかける魔女のような姿に描かれている。

Alexis Easley は、このようなマーティノーへの一連の攻撃を、定期刊行



Harriet Martineau

【図1】

物が栄える新しい出版文化が到来し、社会の導き手としての作家の権威が確立されようとしている中で、女であるにも関わらず政治や経済を主題とする書物を出版した行為に対するものとして説明している。政治や経済など公的領域に関わる書物は男性、日常的な宗教実践や道徳など私的領域に関わる読み物は女性、という当時の出版文化における男女の執筆領域の区分を侵犯する行為に対する制裁ということである。イースリーは『『経済学例解』の出版後、マーティノーはイングランドで最も有名な女性作家になったと同時に、最も悪名高くなった』とも述べている³³。『経済学例解』の出版とその未曾有の成功は、男性作家の領域を侵すものであり、それに対

する抵抗の強さがバッシングの大きさに比例していたといえる。

マーティノーがこのような例外的な存在となることを可能にした一つの要因はユニテリアンの知的コミュニティの存在である。『経済学例解』の出版に先立つ1820年代は、マーティノーのいわば修行時代であった。当初、マーティノーは伝統的な女性の物書きの枠内に収まる青少年向けの宗教指南書や教訓物語を書いていたが、1828年秋にユニテリアン派の雑誌『マンスリー・レポジトリ』の新しい書き手を求める William Johnson Fox (1786-1864)³⁴の広告に応じたことが転機となる。この後の数年間、マーティノーはフォックスの下で非常に広範なジャンル、主題の文章を書き、雑誌の掲げる理念を担う主要な書き手の一人となる。後に『自伝』において、フォックスとの編集上のやりとりについて「紛れもなく、30歳より前の時点までで最大の知的向上を遂げた機会であり、理由でもあった」³⁵と述べている。『経済学例解』によって突如脚光を浴びたマーティノーが、過度な賞賛にも激しいバッシングにも押しつぶされず、その後のキャリアを着実に積み上げることができたのは、この修行時代に培われた職業作家としてのアイデンティティや人的ネットワークに負うところが大きかったと考えられる。

むすび

1830年代初めのベストセラー、『経済学例解』が当時の社会に引き起こした様々な反響を見てきた。この作品が大きな話題を呼んだ理由は、その重層的な新しさであったと言える。社会問題の解決策として当時の新しい学問である経済学を提示したこと、専門的な知識を一般読者にも分かりやすい物語形式で説いたこと、従来、男性のものとされていた政治や経済の領域で女性の書いたものが影響力を持ったことなどである。これらの複数の新しさを偶然ではなく、必然的に結びつけたのが、若き日のマーティノーを育んだユニテリアンの知的伝統だったのではないだろうか。

註

本稿はシンポジウム「19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワークー Harriet Martineau を中心として」における研究発表に加筆修正したものである。

- 1 以降の訳語は『経済学例解』を用いる。
- 2 以降の訳語は『自伝』を用いる。マーティノーの『自伝』は、彼女の死の翌年の 1877 年に出版されたが、執筆されたのは 20 年以上前の 1855 年であることはよく知られている。自らの死期が近いと考えたマーティノーは、これを一気に書き上げ、死後出版のために金庫に保管したが、その後、健康を回復し、当初予定から大幅に遅れての刊行となった。本稿における『自伝』からの引用は、Harriet Martineau, Linda H. Peterson ed. *Autobiography* (Peterborough, Broadview Press, 2007) を使用する。
- 3 [Margaret Oliphant], 'Harriet Martineau,' *Blackwood's Edinburgh Magazine* (Apr. 1877), 484.
- 4 Sanders は 2002 年に彼女の名声は 1830 年代以降で今が最も高まっている、と述べている。Valerie Sanders, 'Harriet Martineau in the Bicentenary Year,' *Women's Writing* 9:3 (2002), 331.
- 5 これらの数字が最初に挙げられたのは、現在も最も信頼できるマーティノーの伝記とされる R. K. Webb の *Harriet Martineau: A Radical Victorian* (London: Heinemann, 1960) で、同じ数字を挙げる多数の著作はこれに依拠していると思われる。しかし、Webb はこの数字の根拠には言及しておらず、実際にいつ 1 万部に達したのかは不明である。一方、Claudia Oražem は出版部数の正確な数字として残っているのは最初の 6 号までに出版者のフォックスとマーティノーの間で交わされた明細書のみであるとし、いずれの号も 2,000 から 3,000 部が発行されていたという。 *Political Economy and Fiction in the Early Works of Harriet Martineau* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999), 90-91. また、Webb は同シリーズの読者層は、ほぼ中流階級であったとも述べているが、明確な根拠は示さず、1 号 18 ペンスという価格は労働者には高すぎただろうと述べるに留めている。
- 6 Dickens の月刊小説の発行部数との比較に言及しているのは Elaine Freedgood, 'Banishing Panic: Harriet Martineau and the Popularization of Political Economy,' *Victorian Studies* 39:1 (1995), 33-53.
- 7 Martineau, *Autobiography*, 150.
- 8 [Josiah Conder], 'Review of *Illustrations of Political Economy* by Harriet Martineau,' *Eclectic Review* 8 (1832): 44-72, rept. in Deborah Anna Logan ed., *Illustrations of Political Economy: Selected Tales* (Ontario: Broadview, 2004), 413-414.
- 9 Review of "Weal and Woe in Garveloch," *The Spectator* (7 July 1832), rept. in *Illustrations of Political Economy: Selected Tales* (2004), 414.
- 10 Deborah Anna Logan, 'Introduction,' Harriet Martineau, Deborah Anna Logan ed., *Illustrations of Political Economy: Selected Tales* (Peterborough: Broadview,

- 2004), 9-13, Valerie Sanders, *Reason Over Passion: Harriet Martineau and the Victorian Novel* (1986), 30-31. Alan Richardson, *Literature, Education, and Romanticism: Reading as Social Practice 1780-1832* (Cambridge: Cambridge UP, 1994), 213-232 を参照。
- 11 刊行前に 500 部以上の予約購読者を確保すること、C. Fox が通常の委託出版における出版者の取り分に加えて、儲けの半分を自分のものとする、契約は 5 号ごとに見直されること、第 1 号の刊行後、最初の 2 週間で 1,000 部以上売れなかった場合は 2 号までで打ち切りとすることであった。Martineau, *Autobiography*, 142.
- 12 Linda H. Peterson, ‘Writing for Periodicals,’ *The Routledge Handbook to Nineteenth-Century British Periodicals and Newspapers*, Andrew King et. al. eds. (London: Routledge, 2016), 77.
- 13 Oražem, 24-28.
- 14 [William Maginn], ‘On National Economy, no. III, Miss Martineau’s “Cousin Marshall”—“The Preventive Check,”’ *Fraser’s Magazine* 6 (1832), 403.
- 15 Oražem, 131. Peterson は *Fraser’s Magazine* をトーリー党寄りと位置付け、編集長の Maginn は強硬な反功利主義であるとしている。Linda H. Peterson, *Becoming a Woman of Letters: Myths of Authorship and Facts of the Victorian Market* (Princeton: Princeton UP, 2009), 90.
- 16 Oražem, 127-130, Joanne Shattock, *Politics and Reviewers: The Edinburgh and the Quarterly in the Early Victorian Age* (London: Leicester UP, 1989), 64-65.
- 17 [George Poulet Scrope], ‘Review of *Illustrations of Political Economy*, nos. 1-12, by Harriet Martineau,’ *The Quarterly Review* 49 (April 1833), 136.
- 18 マーティノーは後年、1850 年代に無神論者としての立場を表明したことで有名だが、『経済学例解』を執筆していた時期は、ユニテリアン派の信仰を持っていた。
- 19 [Margaret Oliphant], 480.
- 20 イエスの神聖の否定は 1813 年までは違法だった。
- 21 ユニテリアンの成り立ちや教義は主に以下を参照。Kathryn Gleadle, *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the Women’s Rights Movement, 1831-51* (1995; Basingstoke: Palgrave Macmillan, 1998), 8-12. Mark Knight and Emma Mason, *Nineteenth-Century Religion and Literature: An Introduction* (2006; Oxford: Oxford UP, 2009), 52-53. グリードルによると、ユニテリアン派は 18 世紀末から急速に知的、文化的勢力として存在感を増したが、信者数は多くなく、1851 年の国勢調査では全国に 221 の会衆があり、推定信者数は 5 万人だったという。
- 22 プリーストリーは、人間は何かの真の原因にはなりえず、「神が原因の原因

- であり、全ての力の唯一の源である」と述べている。Joseph Priestley, *Hartley's Theory of the Human Mind, or the Principle of the Association of Ideas; with Essays Relating to the Subject of It* (London, 1775), 342.
- 23 以降の訳語は『人間論』を用いる。
- 24 Martineau, *Autobiography*, 102.
- 25 [Harriet Martineau] 'On the Duty of Studying Political Economy' *Monthly Repository* 6(1832), 21-34. 形式上は Thomas Cooper 著の経済学書 *Lectures on the Elements of Political Economy* (1831) の書評として書かれている。
- 26 [Harriet Martineau] (1832), 27-31.
- 27 Oražem, 98.
- 28 柳沢哲哉によると、この時期の経済学とキリスト教の関係を対立的に捉える従来の通説は1970年頃から再考され、1990年代に入ると、19世紀初頭における神学と古典派経済学の結合の試みを指す「キリスト教経済学」という用語が定着し、当時の思想状況においてはこのような立場をとる諸理論がむしろ主流であったという見解も示されるようになったという。柳沢哲哉「19世紀前半イギリスにおけるキリスト教と経済思想」『経済学史研究』47.2 (2005), 126.
- 29 David Hartley, *Observations on Man, His Frame, His Duty, and His Expectations*, intro. Theodore L. Huguelet, (1749; New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1976) part 2, 245. Robert Marsh もハートリーの『人間論』におけるキリスト教的な枠組みの重要性について同じ部分を引用しながら論じている。Robert Marsh, 'The Second Part of Hartley's System,' *Journal of the History of Ideas* 20 (1959), 265-273.
- 30 マーティノーは、『自伝』で自分が読んだ『人間論』はハートリーのオリジナル版ではなく、プリーストリーによる縮小版だと述べている。プリーストリー版は、科学的議論として問題の多い「振動説」等に関わる第一部の多くの章と第二部のほぼ全てを割愛したものである。Martineau, *Autobiography*, 102. ジェイムズはハリエットの手紙の要約を独自の速記体で残しており、解説された文面が増補版の書簡集に収録されている。Harriet Martineau, Deborah A. Logan ed., *Further Letters* (Bethlehem: Lehigh University Press, 2012), 407.
- 31 Harriet Martineau, 'Weal and Woe in Garveloch' rept. in Deborah Anna Logan ed., *Illustrations of Political Economy: Selected Tales* (Ontario: Broadview, 2004), 57-136.
- 32 [William Maginn], 'Gallery of Literary Characters, No. XLII, Miss Harriet Martineau,' *Fraser's Magazine* 8 (Nov. 1833), 576. 挿絵画家は Daniel Maclise。図1はウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons) より。Alexis Easley

- によると、このシリーズ記事は 1830 年から 1838 年にかけて連載され、マーティノーの記事は『経済学例解』の人気の最盛期に出た。*First-Person Anonymity: Women Writers and Victorian Print Media, 1830-70* (London: Routledge, 2004), 24.
- 33 Easley, 9, 17-25, 41.
- 34 この時期の『マンスリー・レポジトリ』は、編集長の W. J. Fox のもとで広範な社会改革を目指す革新派のイデオロギーを掲げる総合雑誌となっていた。マーティノーがこの雑誌に寄稿したエッセイにはハートリーの『人間論』の核心をなす観念連合説に関するものも含まれていた。
- 35 Martineau, *Autobiography*, 125.

Bibliography

- [Conder, Josiah]. ‘Review of Illustrations of Political Economy by Harriet Martineau,’ *Eclectic Review* 8 (1832): 44-72. rept. in *Illustrations of Political Economy: Selected Tales*. Ed. Deborah Anna Logan. Ontario: Broadview, 2004, 413-414.
- Easley, Alexis. *First-Person Anonymity: Women Writers and Victorian Print Media, 1830-70*. Aldershot: Ashgate, 2004.
- Gleadle, Kathryn. *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the Women’s Rights Movement, 1831-51*. London: Palgrave Macmillan, 1995.
- Hartley, David. *Observations on Man, His Frame, His Duty, and His Expectations*. Ed. Theodore L. Huguélet. 2 parts. 1749; Delmar, New York: Scholars’ Facsimiles & Reprints, 1976.
- Knight, Mark and Emma Mason. *Nineteenth-Century Religion and Literature: An Introduction*. 2006; Oxford: Oxford UP, 2009.
- Logan, Deborah Anna. ‘Introduction.’ *Illustrations of Political Economy: Selected Tales*. Peterborough: Broadview, 2004, 9-50.
- [Maginn, William]. ‘Gallery of Literary Characters, No. XLII, Miss Harriet Martineau.’ *Fraser’s Magazine* 8 (Nov. 1833): 576.
- [---]. ‘On National Economy, no. III, Miss Martineau’s “Cousin Marshall”—“The Preventive Check.”’ *Fraser’s Magazine* 6 (1832), 403-13.
- Marsh, Robert. ‘The Second Part of Hartley’s System.’ *Journal of the History of Ideas* 20 (1959): 265-273.
- Martineau, Harriet. *Autobiography*. Ed. Linda H. Peterson. Peterborough: Broadview Press, 2007.
- . *Further Letters*. Ed. Deborah Anna Logan. Bethlehem: Lehigh University Press,

- 2012.
- . 'Weal and Woe in Garveloch.' rept. in *Illustrations of Political Economy: Selected Tales*. Ed. Deborah Anna Logan. Ontario: Broadview, 2004, 57-136.
- [---]. 'On the Duty of Studying Political Economy.' *Monthly Repository* 6 (1832), 21-34.
- [Oliphant, Margaret]. 'Harriet Martineau.' *Blackwood's Edinburgh Magazine* (Apr. 1877): 472-496.
- Oražem, Claudia. *Political Economy and Fiction in the Early Works of Harriet Martineau*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999.
- Peterson, Linda H. *Becoming a Woman of Letters: Myths of Authorship and Facts of the Victorian Market*. Princeton: Princeton UP, 2009.
- . 'Writing for Periodicals.' *The Routledge Handbook to Nineteenth-Century British Periodicals and Newspapers*. Eds. Andrew King et.al. London: Routledge, 2016, 77-88.
- Priestley, Joseph. *Hartley's Theory of the Human Mind, or the Principle of the Association of Ideas; with Essays Relating to the Subject of It*. London, 1775. *Google Books Online*.
- Review of "Weal and Woe in Garveloch." *The Spectator* (7 July 1832). rept. in *Illustrations of Political Economy: Selected Tales* (2004), 414.
- Richardson, Alan. *Literature, Education, and Romanticism: Reading as Social Practice 1780-1832*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Sanders, Valerie. 'Harriet Martineau in the Bicentenary Year.' *Women's Writing* 9:3 (2002): 331-336.
- . *Reason Over Passion: Harriet Martineau and the Victorian Novel*. London: St. Martine's Press, 1986.
- [Scrope, George Poulet]. 'Review of Illustrations of Political Economy, nos. 1-12, by Harriet Martineau.' *The Quarterly Review* 49 (April 1833): 136-152.
- Shattock, Joanne. *Politics and Reviewers: The Edinburgh and the Quarterly in the Early Victorian Age*. London: Leicester UP, 1989.
- Webb, R. K. *Harriet Martineau: A Radical Victorian*. London: Heinemann, 1960.
- 柳沢哲哉「19世紀前半イギリスにおけるキリスト教と経済思想」『経済学史研究』47.2 (2005): 125-38.

Summary

The *Illustrations of Political Economy* (1832-34) and the Unitarian Intellectual Tradition

Maiko Ohtake

The *Illustrations of Political Economy* (1832-34) was a monthly series aiming to popularize basic ideas and principles of political economy to the general public. It is well-known that the series became an unprecedented success selling as many as 10,000 copies for each number and making its author Harriet Martineau a national celebrity. Although the series sunk into obscurity fairly quickly and has long been neglected until recently, the impact and implication of such a phenomenal publishing feat are worth reconsidering. This paper examines the multi-layered novelties of this work, which made it not only extremely popular but also severely criticized.

The primary aspect of this series' novelty is its method of 'illustration.' It conveys specific concepts of political economy by incorporating them into imaginative fictional tales, which contributed greatly to its popularity. On the other hand, the way it presents the political economy as an unfailing guide to the solution for all sorts of social issues provoked severe attacks from conservative writers and critics who were suspicious of this newly emerging social science. Lastly, the fact that Martineau addressed problems of politics and economy, which belonged to the public sphere rather than to the private sphere that had been regarded as appropriate for female writers, made her a target of scathing attacks to male writers from the opposing side, who labeled her 'unfeminine.'

Behind these multiple novelties lies the Unitarian intellectual tradition and human network. The moral philosophy of David Hartley (1705-1757)

and Joseph Priestley (1733-1804), which provided the founding principles of Unitarianism, influenced young Martineau most significantly. Her treatment of political economy as an unfailing source of wisdom seems to have derived from their philosophy, particularly their 'necessarianism,' which supposed the divine laws governing the universe. Finally, one cannot neglect the role of the *Monthly Repository*, a Unitarian periodical, in providing Martineau with invaluable experience and a network to become a professional writer.

